

に外へ出て働くものにあつては勤務場所及勤務時間の相違の爲めに
数日間相見ないといふものも少くはない。

シヨオンハルの『勞働』といふ小説にはコンナ事が書いてあつた。
或る處に二人の夫婦があつたが夫は毎夜五時間を要する里程の處
へ車に荷物を山ほご積んで出かけて行つてそして翌朝早く歸るの
であつた。然るに女房は生活の困難の爲めに家の中でケロリカン
として居る譯には行かなくて毎日朝早くから他人の家へ洗濯に出
かけるのであつた。斯ういふ風に夫は夜間妻は晝間働きに出てゐ
る夫婦には二人共通の時間を家内に持つといふ事はなかつた。夫
が家へ歸つて來るときに妻は早くも働いたために家を出てゐる。女
房の歸つて來た時には夫は早や車を曳いて出かけた跡であつた。

或日の事であつた。偶々亭主は出かけるまでに十五分ほど餘裕の
あつたところへ珍しく女房が早く戻つて來た。『おいレンジイ、善い
時歸つたナ、俺には未だ十五分ほど間があるから話でもして行か
ないか』と言つて女房の手を握つた。すると女房は久し振りの對
面に乙女のやうに飛付いて來るかと思ひきや。『うるさいね、一
息吐かしておくれよ、もうくゝ臥びれちやつて手足が何處につい
てゐるか分らないやうだわ。それに明日は判事さん處の洗濯日
なの、話なんかしたいんなら腕の馬でもなさいナ』と突慥に
言ひ放つて部屋に這入り内から鏡を下ろして了つた。けれど翌朝
目を覺して元氣が回復すると出かける前に未だ小半時間餘裕ある
といふところ折善く亭主は歸つて來た。夫れと見た女房は嬉しさ